



歴史ロマンが香る、かしば探訪

## 群馬の縄文土器

企画テーマ展(平成27年度第1回)  
4月4日(土)～5月10日(日)

—岩宿博物館寄贈資料から—

### ◆ 縄文土器とは ◆

**縄文土器** は野天で焼かれた素焼きの土器です。弥生土器などその後の時代の土器と比較すると、少し分厚く作られ、粘土はやや粗く、色も黒味があったものが多いです。また、轆轤(ろくろ)を使わずに作っていて、表面にはさまざまな文様が描かれていることも縄文土器の特徴です。縄文土器は日本列島のほぼ全域に分布していて、長い縄文時代の時期ごとに、また地域ごとに、土器の形、粘土の種類、製作方法、表面の文様などに特徴があり、似た土器のグループ(「型式(けいしき)」と呼ぶ)を把握することが可能です。この縄文土器の型式を整理することで、時期による土器の移り変わりや、土器の地域的な広がりを知ることができます。

### ◆ 縄文土器の名称 ◆

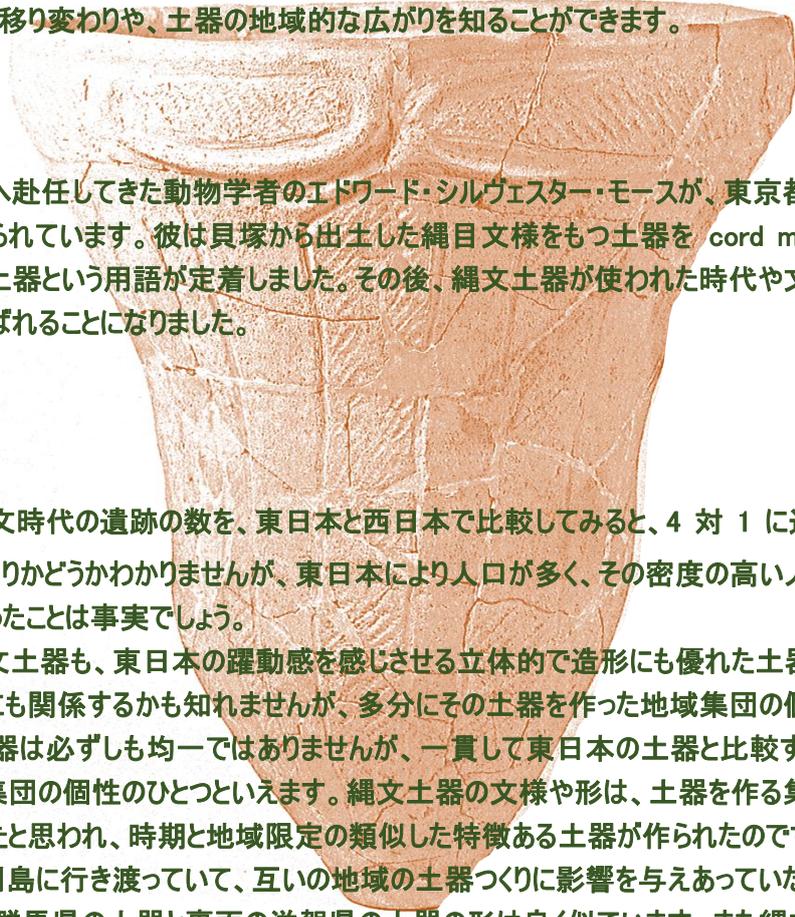
1877年にアメリカから東京大学へ赴任してきた動物学者のエドワード・シルヴェスター・モースが、東京都の大森貝塚の発掘を行ったことは良く知られています。彼は貝塚から出土した縄目文様をもつ土器を cord marked pottery と呼び、その訳語から縄文土器という用語が定着しました。その後、縄文土器が使われた時代や文化の名称も、縄文時代や縄文文化と呼ばれることになりました。

### ◆ 東と西の縄文土器 ◆

**現在** までに発見されている縄文時代の遺跡の数を、東日本と西日本で比較してみると、4 対 1 に近いほどの差があります。実際の数がこの通りかどうかわかりませんが、東日本により人口が多く、その密度の高い人口を支えるだけの恵まれた環境の下にあったことは事実でしょう。

岡本太郎が芸術的だと言った縄文土器も、東日本の躍動感を感じさせる立体的で造形にも優れた土器を評価したものです。しかしこれは豊かさにも関係するかも知れませんが、多分にその土器を作った地域集団の個性の表れだと考えられます。西日本の土器は必ずしも均一ではありませんが、一貫して東日本の土器と比較すると、地味な感じがしますが、これも地域集団の個性のひとつといえます。縄文土器の文様や形は、土器を作る集団の伝統や約束事などが深く関わっていたと思われ、時期と地域限定の類似した特徴ある土器が作られたのです。

一方で土器づくりの情報は日本列島に行き渡っていて、互いの地域の土器づくりに影響を与えあっていた側面もありました。この面の背景写真の、群馬県の土器と裏面の滋賀県の土器の形は良く似ています。また縄文部と無文部を分ける「磨消縄文(すりけしじょうもん)」は、縄文時代後期に広く日本列島に流行する文様のひとつです。



今回の展示品はいずれも縄文土器の破片ですが、普段接することのできない関東地方の縄文土器の立体的な造形や、力強く描かれた文様の片鱗をご覧ください。

### ◆ 縄文土器の文様 ◆

**縄文土器** の表面には縄だけでなく、さまざまな道具を用いて文様を描いています。縄文は撚った細い縄を表面に転がしてつけた文様ですが、ほかにも彫刻した棒や、軸に撚り紐を巻きつけた道具を転がしてつけた文様などがあります。また貝殻や竹管などの自然物を道具として使って直線や曲線を描いた文様や、粘土を紐状にして貼りつけて土器面を区画することも多いのです。

縄文土器の文様は現実にあるモノやヒトを描くことは稀にしかありません。ほとんどが紋やデザイン化された意匠的なもので構成されています。その文様には土器を製作したグループ人々には理解できる意味があったと考えられます。日常私たちが言葉と言葉を語法によって順序だてて並べることで意思が通じるように、紋や意匠を組み合わせることで、土器型式を共通する集団内で通じる意思を表現したのでしょう。

### ◆ 縄文土器の形 ◆

縄文土器が出現した当初は、土器の形は **深鉢**（ふかばち）と呼ぶように、底が丸く深い鍋形のものに限られていました。また遺跡から出土する土器には、外側に煤が付着していたり、内側に焦げた物質が付着しているものがあり、もっぱら食物を煮炊きするために使用されたことがわかります。形は熱効率や使い勝手を考慮したため深鉢の形が選択されたのでしょう。その後の縄文土器は、蓄え用の壺や、取り分け用の皿、液体を入れた注口形など、用途の広がりによってさまざまな形が出現することになります。

特に縄文時代の後半になると、祭祀や儀礼などに用いられたとみられる、赤い漆を塗ったり、籠などの器物を模した土器なども作られるようになります。

縄文土器のいろいろな形は常設展示の **狐井遺跡** の展示コーナーを参考にをご覧ください。

### ◆ 香芝の縄文土器 ◆

**香芝市** にも縄文時代の遺跡があります。下田では縄文時代早期に遡る古い押型文土器と呼ばれる、彫刻した棒を転がしてつけた文様が特徴の土器が見つかっています。狐井からは縄文時代前期の土器が纏まって出土しています。この土器は表面に縄文がつけられた、まさに縄文土器らしい土器です。粘土を紐状にして貼り付け、そこに篠竹を縦に裂いた道具で刻みをつけるほか、丁寧に作られた多彩な縄を転がして文様をつけているなど、縄文人の繊細さや美的感覚を垣間見ることができます。瓦口の土器は縄文時代後期のもので、小さな巻貝をつかって線を引いたり、貝を押し付けた文様が観察できます。鎌田から出土した土器は縄文時代の終わりに近い晩期の土器で、口と胴の上部に刻みをつけた粘土紐を巡らしているのが特徴です。

これら市内出土の土器は、常設展示室の縄文時代の展示コーナーで見ることができます。

## 企画テーマ展(平成27年度第1回)開催

### 「群馬の縄文土器—岩宿博物館寄贈資料」

会期：平成27年4月4日(土)～5月10日(日)

開催時間：午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)

休館日：毎週月曜日

観覧料：一般200円(150円)、高・大学生150円(100円)、小・中学生100円(50円)

\* ( )内は20名以上の団体割引料金。

展示解説シート No.9

平成27年4月1日発行

### 香芝市二上山博物館

〒639-0243 奈良県香芝市藤山一丁目17番17号

TEL.0745-77-1700 FAX.0745-77-1601

E-mail [nijyouzan@city.kashiba.lg.jp](mailto:nijyouzan@city.kashiba.lg.jp)